

(別紙)

平成29年度農林水産祭むらづくり部門農林水産大臣賞受賞

博愛の里上野におけるむらづくりの概要

1 地域の概要

博愛の里上野（旧上野村）は、宮古島の南西部に位置し、航空自衛隊宮古島分屯基地のある野原岳を隔てて旧城辺町に接し、西は旧下地町、北西は旧平良市に接している。

旧上野村は、1948年（昭和23年）8月1日に旧下地町から分村したが、平成17年に周辺市町村（平良市、下地町、城辺町、伊良部町及び上野村）が合併し宮古島市となっている。面積は宮古群島の8.38%で、宮古島市の旧市町村の中においては最小の規模となる。

本地域には、1873年（明治6年）7月11日にドイツ商船ロベルトソン号が上野宮国沖で座礁し、上野の人々が乗組員を救助したことを受け、1876年（明治9年）当時のドイツ皇帝ウイルヘルム一世から、宮古島の人々の勇気と博愛精神を讃える記念碑を贈られたという歴史がある。

この博愛精神を広く正しく後世に伝えると共に、国際交流の拠点としてドイツとの友好を深め、末永く交流するため、更には、観光の振興や地域の活性化に資する目的で、1993年（平成5年）7月12日に「うえのドイツ文化村」が建設されている。

また、2000年（平成12年）に九州沖縄サミットが開催された際、当時のドイツ首相シュレーダー氏が当地を訪れたことにより、国際的にも注目を集めた。その際、同氏が通った宮古空港からうえのドイツ文化村までの道は、シュレーダー通りと称されている。

このような歴史的背景があり、当該地域は「博愛の里」として親しまれている。



1993年に建設されたうえのドイツ文化村

博愛の里上野地域

2 農業生産活動の特色

本地域は、ゴーヤー、オクラ、マンゴー等の生産が盛んで、特にとうがんの出荷量（平成27年産489t）は宮古島市全体の約7割を占めている。また、ゴーヤーについては、出荷量が宮古島市全体の約3割を占め、平均単収が8.9tと同市全体の平均単収5.9tに比べかなり高くなっている。

とうがんやゴーヤーの栽培技術向上や担い手育成等地域農業活性化の取組は、沖縄県の拠点産地の認定につながり、優良農家を数多く輩出するなど県内外からも高く評価されている。これらは本地域における農業の生産振興に寄与するだけでなく、宮古島市全体の農業の活性化にも大きく貢献するとともに、今後も地域の農業の競争力強化を実現し、農業分野における更なる成長が期待されている。



宮古島市全体の約7割の出荷量を占める
とうがん



沖縄県野菜品評会において農林水産大臣賞を
受賞した本地域生産者のゴーヤー

3 地域づくりの特色

本地域では、歴史的背景を受け、先人の偉大なる「博愛精神」を讃えながら、「博愛」を理念としたむらづくりが進められている。時代の変遷を経ながらも、地域内の悪霊や悪疫を追い払う重要無形文化財の「サティパロー」、中秋の名月の日に行われる豊年祭の「マストリヤー」など古くから続く伝統行事が数多く受け継がれ、地域住民の生活に深く根ざしている。

また、芸能保存会が中心となり、獅子舞、棒踊り、女踊り、綱引きなど当地域に古くから伝わる伝統芸能の保存のため、小中学校の運動会や学習発表会等を活用しつつ、地域ぐるみで伝統芸能の指導にも取り組んでいる。

一方で、市町村合併後、本地域の活動が衰退していると住民の声も多く、地域の連帯感、自治意識が希薄となる中、地域活動の活性化を図るため、平成20年5月に「博愛の里上野地域づくり協議会」が発足した。本協議会を中心として、住民の連帯感を高める契機とするために、青年会、婦人会、子供連絡協議会、ドイツ文化村観光振興協議会等が連携して、平成20年11月より地域住民が集う「博愛の里上野まつり」等を開催している。

さらに、本地域では急速に過疎化が進み深刻な社会現象となったことから、旧上野村が定住促進を図るため、平成13年度離島・過疎化地域振興特別事業を活用し、住宅用地を造成し分譲を行っている。また、本協議会では、上野地域には独身男性が多いことから、地域の発展と少子高齢化に歯止めをかけることを目的として、宮古島市内在住の満20歳以上の女性を募集して婚活パーティーを開催している。

このような取組が功を奏し、現在の上野地域における人口は下げ止まりの傾向にある。



伝統行事の「サティパロー」



博愛の里上野まつり

以上の本地域における取組は、地域の振興・発展等に大きく貢献しており、むらづくりの優良事例として高く評価されたものである。